

FLORA KANAGAWA

Apr. 1. 1996 No. 42

神奈川県植物誌調査会ニュース第42号

〒250 小田原市入生田499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515 内線420・振替 00230-5-10195



アケボノシュスラン. 1995年10月9日. 天照山にて.(内田 藤吉氏撮影)

山本 明: 鎌倉でイシカグマを発見.....	452
大森雄治: アメリカ海軍横須賀基地内の帰化植物.....	452
西山清治: 神奈川県新産の植物, ツルギキョウとヤマアイ.....	453
田中一雄: ナチシダ <i>Pteris wallichiana</i> Ag.	454
田中一雄: ミヤコイヌワラビ <i>Athyrium frangulum</i> Tagawa.....	454
田中一雄: 「箱根外輪山産の北限新産地シダ植物について」の訂正.....	455
浜中義治: ハーブと帰化植物.....	456
林 辰雄: 柏尾川にミズキンバイ多産.....	458
事務局: 神奈川県植物誌改訂作業について.....	459
神奈川県植物誌調査会名簿.....	461

鎌倉でイシカグマを発見

(山本 明)

イシカグマは暖地の海岸近くにあり、紀伊半島や四国、九州などでは普通にみられる種類であるが、関東ではきわめて稀であり伊豆七島などの島嶼にはあるものの、そのほかには千葉県館山で採集された記録があるくらいである(日本のシダ植物図鑑1, 1979)。本県でも先に出版された『神奈川植物誌1988』でフモトシダ属を書かれた秋山守先生は未採集であるとされ、小崎昭則氏は横浜市旭区川井宿町の都筑自然公園のカナリーヤシに着生していたものを移入として報告しているに過ぎない(多摩丘陵のシダ植物, 1994)。

ところが本年の1月の植物誌調査会の臨時総会の折に、大森雄治先生から御依頼のあったシダの標本を帰宅してから見ると、まさにイシカグマそのもので、採集者は横須賀の石渡宏先生で、1994年1月30日の採集品であった。採集地が鎌倉市とあるだけなので、早速、大森先生に連絡をして石渡先生に現地を御案内していただくことにすると同時に、慎重を期して標本を千葉県立中央博物館の中池敏之先生にお送りして確認していただいた。

2月8日、石渡先生の御案内で大森先生と3人で現状を調査に出かけた。鎌倉駅からすぐの御成トンネルの近くの車道脇の明るい崖地にイシカグマは生育していた。3株と幼形が数株あり、すでに新葉が動き始めていた。まわりにはヤブソテツ、ヤマヤブソテツ、オニヤブソテツ、ホシダ、オオバノイノモトソウ、オクマワラビ、クマワラビ、イノデなどが見られた。現地は由比ヶ浜の海岸から直線距離で1.2km程のところであり、周囲の状況からみて自生であろうと思われた。神奈川新産種であるのでぜひとも十分な保護が望まれる。

それにしても、今まで誰にも気づかれなかったのは不思議な気がするが、最近和歌山県でソーラスをつけたヘゴの立派な株が車

道から見えるようなところに発見された例もあり、シダ類の調査の大切さと面白さをあらためて感じた次第である。

石渡先生が最初に採集された標本は横須賀市博に、今回の標本は県博に証拠として納入し、日本のシダ植物図鑑8(補遺篇)の引用標本としても記録した。

この報告を書くに際して、標本の検討の機会を与えられ、また御多忙なところをわざわざ御案内いただいた石渡、大森の両先生に心から御礼を申し上げます。

アメリカ海軍横須賀基地内の帰化植物 (大森雄治)

1988年までの植物調査でも歩くことができなかった地域は、三浦ブロックでは逗子市池子や横須賀市内の米軍基地や自衛隊の基地があげられるが、昨年、米軍基地内で採集された資料を見る機会を得た。その中に神奈川県内では比較的稀な帰化植物3種の標本が含まれていたのので報告する。

ハワイの熱帯植物園で太平洋諸島の植物を研究されているアーサー・ウィスラーさん(Dr. W. Arthur Whistler)が、横須賀米軍基地内で採集された植物の同定依頼に、1995年4月27日と5月2日に横須賀市自然博物館を訪れた。在外米軍基地やそれに伴う施設敷地内の自然環境を(絶滅危惧種や希少種、あるいは貴重な植生を保護することを目的として)調べるのが法律によって義務づけられたための調査とのことであった。

現在、米海軍基地のある横須賀市泊町や楠ヶ浦町は幕末の横須賀製鉄所から明治の横須賀造船所、海軍基地となって以来、普通の市民が入ることができず、三浦半島では見られなくなった植物も残っているのではと期待されたが、調査期間が短く、時期も4月末から5月はじめと限られていたため、十分な調査はなされなかったようで、調査結果の植物目録には300種ほどが記録され、全国版レッドデータブックの危急種としては

ラン科のエビネが挙げられていた。採集された標本の多くは三浦半島で普通にみられるものであり、以下の帰化植物が神奈川県新産あるいは県内では稀な種類であった。標本はいずれも横須賀市自然博物館に保存してある。

ハナヌカススキ *Aira elegans* Wild. ex Gaudin
鶴見、茅ヶ崎、金沢の記録がある(神奈川県植物誌調査会, 1988)。

産地:横須賀市箱崎町(米軍吾妻倉庫)

高さは約12cmで繊細な感じで、果実も小さく小穂の長さは約2mm。小穂は2個の小花からなり、母種は2個の小花の内1個だけに芒が出るが、今回採集されたものは、ひとつの小穂から2本の芒が出ている、つまり各小花に1本ずつの芒があるタイプで、亜種ssp. *ambigua* (Arcang.) Holubに当たる(長田, 1989)。

マツバウンラン

Linaria canadensis (L.) Dum.

平塚、鶴見、横須賀の記録がある(神奈川県植物誌調査会, 1988)。

産地:横須賀市箱崎町(米軍吾妻倉庫)

茎の先には鮮やかな青紫色の花がついている。

メリケントキソウ *Soliva sessilis* Ruiz et Pav.
神奈川県では初記録。

産地:横須賀市泊町・楠ヶ浦(米軍基地)

南米原産で、和歌山県の記録がある(長田, 1976)。米軍基地内に見られるものは、神奈川県周辺の都県での記録がないので、国内で分布が徐々に広がった結果と考えるより、直接外国から入った可能性が高い。一見、マメカミツレを思わせるが、小型で高さ5cmほど、茎、葉、総苞片に軟毛が密に生え、特徴的な頭花と果実を持つ。頭花は直径約5mm、イガグリ状で根際に1個つき、その頭花の下から伸びた枝の節々にも頭花が次々にでき、周りを羽状複葉が取り囲む。果実には1本の刺があり、長田先生の表現をお借りすれば、カブトガニ、あるいは昔、喫茶店にあったテレビ

ゲームの戦闘機を連想させる。

引用文献.

神奈川県植物誌調査会, 1988. 神奈川県植物誌1988. 神奈川県立博物館.

長田武正, 1976. 原色日本帰化植物図鑑. 保育社.

長田武正, 1989. 日本イネ科図譜. 平凡社.

神奈川県新産の植物, ツルギキョウとヤマアイ

(西山清治)

三浦ブロックでの調査で神奈川県で初めての記録と思われるツルギキョウとヤマアイを採集し、横須賀市自然博物館に収めたので報告する。

ツルギキョウ

Campanumoea maximowiczii Honda

横須賀市にお住まいの石井寿子さんから、三浦半島のほぼ中央に当たる横須賀市平作3丁目で1994年9月23日に開花中のツルギキョウを見たとの連絡をいただいた。11月29日に同地を訪れ、果実をつけたつるを見つけて採集した。葉は心形で、果実は液果となることが特徴で、本州では北関東以南に分布し、隣接する東京、千葉、静岡では記録されている。

ヤマアイ

Mercurialis leiocarpa Siebold et Zucc.

観音崎公園の植物を調査中の観音崎自然博物館研究員間瀬浩子さんから、ヤマアイを見つけたとお知らせいただき、1995年1月21日に観音崎公園に隣接する防衛大学の敷地内で2, 3株を採集した。植林地の林縁で日当たりのよい場所に3, 4m四方に広がって生えていた。本来の自生地は林床なので観音崎のものは造成、または植林による移入の可能性が高い。採集した個体は雄株であり、間瀬さんが観音崎自然博物館に移植した株も実を付けないとのことだった。静岡県熱海までは記録がある。

ナチシダ *Pteris wallichiana* Ag.

(田中一雄)

1995年7月23日、南足柄市荻野・狩川水系の明神ヶ岳に続く尾根北斜面の30年生スギとヒノキ混植林(標高約230m)の林床に全長1.5m程に成長したナチシダ1株を発見しました。

長さ1m以上で葉柄の直径が20mmを越える大きな葉が4枚、それ以下の葉は3枚、すべての葉にソーラスを着け、大きく鳥足状に葉を広げている成熟した株です。

この斜面は、林床性シダ植物に適した環境にあるようで、このエリアだけで80種を越すシダ植物を確認しています。その中でとくに、神奈川県ではきわめて稀な、暖地性ヘラシダ属が多く見られるのが特色です。

もちろん産量は少ないのですが、ヒカゲワラビ、オニヒカゲワラビ、シロヤマシダ、ニセコクモウクジャク、ミヤマノコギリシダ等で、キヨタキシダは普通にみられます。ヘラシダとノコギリシダはありませんが、同じ狩川水系のもっと標高の低い場所には多く見られます。これだけの *Diplazium* のある地域は、神奈川県内ではたぶん他にはないと思われれます。これによっても、この場所は、ナチシダの生育に適した温かく適湿な環境と考えられます。

ナチシダの分布は九州以南を本拠地として、太平洋側は千葉県房総半島の清澄山を北限とする沿岸、日本海側は島根県出雲を北限とする暖帯下部に分布しています。

神奈川県での発見報告は少なく、周辺を含めても数例の記録があるのみです。そこで報告を追ってみますと、下記のようになります。

- (1)熱海市伊豆山、朝倉修一、飯田和、田代信二、西尾和子、1957年。『小田原市附近の羊歯植物目録』(朝倉修一ほか、1957)
- (2)熱海市伊豆山、採集者・採集年記載無し。『神奈川県植物誌1957』
- (3)熱海市伊豆山、飯田和、1958年。『日本のシ

ダ植物図鑑1』(倉田悟・中池敏之、1979)

- (4)湯河原一泉の県境、陣野一郎、1958年。『横須賀市博物館研究報告12』(大谷茂、1966)
- (5)湯河原広河原、飯田和、1958年。『日本のシダ植物図鑑1』(倉田悟・中池敏之、1979)
- (6)奥湯河原、飯田和、1959年。『横須賀市博物館研究報告12』(大谷茂、1966)
- (7)奥湯河原、泉、伊豆山、採集者・採集年記載無し。『箱根の樹木と自然』(木原均編、1971)

以上を考察してみますと、(1)から(3)までは明らかに静岡県産であり、同一採集者による同一株の標本と思われます。(4)は県境となっており完全に神奈川県産と言い切れないものがあります。(5)は広河原とありますので、明らかに神奈川県産と考えられます。(6)は(5)と重なるエリアなので、あるいは同一株と思われなくてもありませんが、一応別株としておきます。(7)は(1)~(6)までをまとめたものと考えられますので、今までに神奈川県にて発見されたナチシダは、1958年の湯河原広河原産と1959年の奥湯河原産の飯田和採集による各1株であったろうと推察いたします。

上記の記録以後、神奈川県および周辺でのナチシダ発見および同株の経過報告がまったく途絶えていることから、『神奈川県レッドデータ調査報告書』(1995)で述べられているとおり、ナチシダは1959年以来神奈川県から姿を消していたものと考えられます。

この度、36年ぶりの神奈川県産ナチシダを、南足柄にて発見できたことは、よろこびにたえません。

ミヤコイヌワラビ

Athyrium frangulum Tagawa

(田中一雄)

1995年7月23日、ナチシダのあった場所より狩川のやや上流部の標高約260m、やはりスギとヒノキの混植林の林床北面に、全長

25cmほどのミヤコイヌワラビ1株を発見しました。葉柄が緑色、葉軸が紫紅色のタイプで典型品とはやや異なりますが、他のイヌワラビ類より瑞々しく感じます。小羽軸状には刺状の突起が大きく明瞭で、ホソバイヌワラビより顕著に見えます。ほぼ成熟している株で、6枚出している葉の4枚にソーラスを着けていました。

この林床は表面的に見ると乾燥しておりミヤコイヌワラビの好む陰湿な環境ではありませんが、よく見ると斜面の末端部から湧水していますので、地下水脈があり、外観よりも地中の水分は高いのかも知れません。

このミヤコイヌワラビの周囲には、神奈川県ではきわめて珍しいナガバノイタチシダが50株を越す群落を作っています。ナガバノイタチシダは暖帯下部から亜熱帯にかけて分布し、水のしみ出るような陰湿で表土の深い谷筋を好み、このシダが群落を作っていることから考えても、この場所は意外に適湿なのかもしれません。

ミヤコイヌワラビ(葉柄が緑色のダンドイヌワラビも含んで)の分布は、栃木県以南に点在しますが、量は多くありません。神奈川県の記事を追ってみますと、下記ようになります。

ミヤコイヌワラビ

- (1)奥湯河原, 田代信二, 飯田和, 西尾和子, 1957年。『神奈川県植物誌』(1958)
- (2)奥湯河原, 小塚山, 採集者記載無し, 1957年。『横須賀市博物館研究報告 13』(大谷茂, 1967)
- (3)奥湯河原, 採集者記載無し, 1958年。『横須賀市博物館研究報告 13』(大谷茂, 1967)
- (4)奥湯河原, 採集者・採集年記載無し。『箱根の樹木と自然』(木原均編, 1971)

ダンドイヌワラビ

- (1)奥湯河原, 早川上流・小塚山, 採集者・採集年記載無し。『神奈川県植物誌』(1958)
- (2)箱根白銀山, 田代信二写真, 1961年。『横須賀市博物館研究報告 13』(大谷茂, 1967)

- (3)奥湯河原, 早川上流, 採集者・採集年記載無し。『箱根の樹木と自然』(木原均編, 1971)

これらの報告をみても、神奈川県での産地は限られ、箱根外輪山の白銀山を除けば、小塚山を含めて早川上流と奥湯河原のみであることがわかります。

1957年の田代らによる奥湯河原産と、1961年の写真による田代の箱根白銀山産の2点については、採集者・採集年が明確になっているので確実な記録と言えるでしょう。他はその引用が多いと感ぜられます。

1961年以来報告の途絶えていたミヤコイヌワラビを、ここに34年ぶりに発見できたことを報告できることは嬉しいことです。

「箱根外輪山産の北限新産地シダ植物について」の訂正

(田中一雄)

FLORA KANAGAWA No. 40にて上記のタイトルで報告しましたコクモウクジャク *Diplazium virescens* Kunzeにつきまして葉形が何となく気になっていましたが、ニセコクモウクジャクではないのかとの御指摘をいただいたので1995年12月に再度採集をして詳しく観察をしておきました。念のため千葉県立中央博物館の中池敏之氏と静岡市の志村義雄氏に標本を送って同定していただき、ニセコクモウクジャク *Diplazium virescens* var. *conterminum* (H. Christ) Sa. Kurataに確定いたしました。ここに訂正いたします。

ニセコクモウクジャクはソーラスが辺よりに着き、母種のコクモウクジャクはソーラスが辺と中肋の中間に着くこと以外は、両者ともほとんど同じの上、神奈川県にはそれまで記録がなく見慣れていなかったために、三浦半島で発見されていたコクモウクジャクと誤認してしまいました。

分布は母種のコクモウクジャクと変わらず伊豆半島が北限となっていました。もち

ろん神奈川県には初産で、北限新分布となります。

それにしても、神奈川県にニセコクモウクジャクが出現するなんて夢にも思っておりませんでした。

ハーブと帰化植物

(浜中 義治)

ヨウシュメハジキ *Leonurus cardiaca* L.

私が北海道在住の頃、1978年(昭和53年)9月30日、北見市昭和で見慣れないシソ科の植物を発見しました。植物同好会の先輩に見ていただいたり、図鑑で調べたものの名前がわかりません。そこで、この標本を東京都立大学牧野標本館に送り、同定をお願いしたところ、同館の小林純子先生から、この植物は中央アジア原産の*Leonurus cardiaca* L.という植物であろうというお返事をいただきました。和名もなく、おそらく未発表のものであろうということで、さらに写真を撮って小林先生にお送りし、後々の研究の資料として役立てていただくようお願いしておきました。私の記録には、「茎は方形で稜上に白毛あり対生の葉は3浅～中裂する。葉の表面には粗い毛が、裏には、ねた毛が密生する。全体に不規則な粗い鋸歯がある。葉腋から5～7個の花が輪状につく。花は淡い紅紫色で上唇の裏側に綿毛を密生する。」と、書かれていました。

その後、私の植物記録の中にこの学名のまま記録されて、いつとはなしに忘れ去っておりました。先日、FLORA KANAGAWA, No. 34の中の「続々あらわれた帰化植物」という勝山輝男氏の記事を読み、そのなかで再び*Leonurus cardiaca* L.という学名に出会いました。採集者の精力的なエネルギーに驚かされるとともに、この植物について、新しい発見がなされました。

勝山氏が1992年(平成4年)4月22日、横浜市中央区新港埠頭で採集し、ミナトメハジキ

と新称された植物は、学名が「*Leonurus cardiaca* L.」とあり、私が北見市で発見した種とクエスチョンマーク付きとはいえ同一の学名でした。FLORA KANAGAWAの記録では「メハジキに似るが花は白色で小さく、上唇の外面に毛があり、がく片は針状に尖る。花は4月に咲き始め、6月には結実して枯れてしまった。」と書かれています。

最近、私はハーブについて、多少の栽培を試み、また興味をもって観察を続けてきました。ハーブの店でリチャード・メイビー著の『ハーブ大全』(難波恒夫ら訳、小学館、1990)という書物を購入しました。その中で、この学名と三度目の出会いをしました。注意深くその記事を読み大いに興味をひかれました。和名はヨウシュメハジキ、英名はMotherwort(母の草)または、Lion's tail, Lion's earと書かれており、写真も載っていました。成分として、アルカロイド・苦味配糖体・精油・ビタミンAを含み、地上部を薬用とするそうです。母の草という英名は、産後の鎮静薬に使われたからで、更年期の不安を緩和するためや、月経の正常化にも用いられたようです。

ついでながら、メハジキ*Leonurus sibiricus* L.という植物は神奈川県各地に見られますが、この植物も薬用植物で、益母草(ヤクモソウ)という名があり、漢方では婦人病の薬として用いられ、利尿・消炎・解毒・瀉下などの効果があるといえます。春の若草を水にさらせば、食用となり、羊の良い飼料にもなるといいます。

話を元に戻しますと、つまりは*Leonurus cardiaca* L.という植物に2つの和名ができてしまったのかも知れないというわけです。そこで勝山氏に北見で見た植物の写真を送り、電話で話してみました。すると、勝山氏は、以前からミナトメハジキが本当に*L. cardiaca* L.かどうかを疑問に思っていて、国立科学博物館に標本を見に行ったのだそうです。ところが、科博にあった*L.*

cardiaca L.の標本は、お送りした写真や『ハーブ大全』に載っている植物と同じものでしたが、新港埠頭のミナトメハジキとは別種だったそうです。もしかすると、別属かもしれないと考えているそうです。

そうなると、*Leonurus cardiaca* L.はヨウシュメハジキでよいとして、これからミナトメハジキにはどんな学名がつくのが楽しみです。

ヨーロッパヒカゲミズ

Parietaria diffusa Mert. et Koch.

勝山氏や故森茂弥氏は元鶴見高校の先生でしたが、同校の庭に非常に珍しい植物があるということを両氏からしばしば聞いていました。かねてからこの植物を一度は見てみたいと願っていました。1988年(昭和63年)6月10日、鶴見高校を訪ね、念願の植物を手にすることができました。それは校庭のコンクリートに囲われた一角に生えていて、今まで見たことの無い草でした。学名は*Parietaria diffusa* Mert. et Koch.で、大場達之氏は、和名としてカペイラクサという新称を与えています。ヨーロッパ原産の多年草であり、日当たりの良い石垣や壁を好んで生育し、高さ30~40cm、枝分かれが多く、伏すか斜上、葉は狭卵形で互生、全縁、先は尖り、基部は狭いくさび形。茎や花序には軟毛が密生する。花は葉腋に球状にかたまり軟毛に包まれます。

この植物もまた『ハーブ大全』の中で、ヨーロッパヒカゲミズとして紹介されていて、英名はPellitory-of-the-wallです。成分として苦味配糖体・タンニン・硫黄・フラボン・カリウム・カルシウムを含み、尿の停留・膀胱炎・腎炎・前立腺の炎症・尿路結石の治療に、鎮静作用のある利尿薬として用いられるという。また、フランスでは生の植物を使ったハップ剤が、尿の停留や膀胱炎の治療のために腎臓や膀胱の部分に貼って用いられると書かれています。

ハーブとは何か、難しい定義はさておいて、栽培植物ではなく、天然の野生植物の中で人間に利用される植物、すなわち香料・料理・薬用など多岐にわたって利用される植物のことです。前記の『ハーブ大全』の中に帰化植物の名が散見されるので、いくつかをお示しします。ヒレハリソウ、ザボンソウ、キクニガナ、オランダガラシ、メマツヨイグサ、ヨウシュヤマゴボウ、セイヨウオトギリソウ、ピロードモウズイカ、シロバナチョウセンアサガオ、コエンドロ、クマツヅラ、ニオイスマレ、カミツレなど。

現在、ハーブと称する植物は約500種が日本に紹介されています。また、各地にはハーブの研究会があって、各種のハーブの研究や栽培を行っています。私は、かつて多摩市のある研究会を訪問したことがあり、入会のことを聞いてみたのですが、今は定員一杯なので次回まで待つて欲しいということでした。ここでは種々のハーブを栽培し、会員には無料で分けてくれます。ハーブを手に入れる方法としては、このような研究会に入るのも一法ですが園芸店に行けば、たいていハーブコーナーがあって手に入れます。そのほかにハーブ専門の販売店もあります。また、各地の植物園ではハーブばかりを集めたコーナーを目にすることがあります。このようにハーブは我々に身近な植物として、生活の中に取り入れられる機会も多くなってきました。しかも山野草などと違って、手間もかからずたいへん育て易いと聞いています。私の経験でも、ろくに手入れをしないで伸び放題に伸び、始末に困るほどたくましいものもあります。このような植物が、何かの機会に人の手を離れ、逸出して野生化することは十分に考えられることです。

このことについて、とくに研究された文献を目にしたことはありませんが、今後はこの方面にもっと関心をもち、観察を怠らなないようにしたいものです。

柏尾川にミズキンバイ多産

(林 辰雄)

『神奈川県植物誌1988』では、分布を示す黒丸が三浦の1ヶ所しかないミズキンバイ *Ludwigia tsipulacea* (Ohwi) Ohwiが、柏尾川にたくさん見られるので報告します。

気がついたのは1995年9月29日で、このときは花の盛期を過ぎていましたが、歩いている対岸に黄色い花が点々と咲いていて、何かなと近くから見たらミズキンバイでした。

柏尾川は、戸塚駅付近から大船辺りまで、水際に沿って歩けるコンクリート舗装の遊歩道ができていて(一部工事中)、このプロムナードを歩けば、春から秋まで帰化植物を含めていろいろな植物が見られ、楽しい観察コースになっています。

上倉田団地の近くにかかる無名の橋の袂から、左岸のプロムナードに入ると、秋はオオイヌタデやセイバンモロコシなどが多く、ヌマガヤツリや相模川河口堰の建設で話題になったタコノアシが、コンクリート舗装の

わずかな切れ目から伸びているのが目に入ります。この道はすぐ畑で遮られるので、いったん左手に上がって車道と平行に進み、アレチウリが繁茂する道から再び水際に戻ります。ここから少し下流に進めばミズキンバイが見られ、これより上流には無いようです。

ミズキンバイは流れによって運ばれた土砂が島状になったところに根をおろし、長さ15m、幅4mほどの面積を占めています。黄色い花は最盛期を過ぎていたためか、それほど多くはありませんでしたが、それでも10数個ほど見られました。地面から出ている茎につく葉は長だ円形ですが、下流になびいているつる状の茎につく葉は卵円形で、葉の形は二型あります。

ここから下流に歩けば、同じような土砂の堆積のあるところにはミズキンバイの生育が見られ、その数は少なくとも8ヶ所以上ありましたが、初めにあった大きな面積に比べると、はるかに小さいものです。今後も似た



ミズキンバイ

ような「島」ができれば、さらに下流に向かってミズキンバイの生育地がふえると思われる。

豊田堰橋に近づくと、そこから下流には島はなくなり、一面の水面となって、ミズキンバイは見られなくなります。次の下水処理場進入橋かその先の柏尾橋を渡って、右岸の土手の上の道を行くとすぐ、柏尾川遊水池が現れます。水の無い遊水池には大きくなったタチヤナギが目立ち、セイタカアワダチソウが群生します。数年前まではここもタコノアシがたくさんありましたが、セイタカアワダチソウがふえた分、タコノアシが減ったようです。

信号のある久保橋の袂を少し行くと、1mほどの高さのゲートがあって、これを乗り越えれば遊水池のほとりにでられます。コガマ、メリケンガヤツリ、ホウキギクの多い所で、ヒメムツオレガヤツリが数十株見られ、メグサハッカを見たのもこの辺でした。

ここに来るまでに見られたおもな植物には、前記のもの他に、コセンダングサ、ヨシ、ヨモギ、アリタソウ、ユウゲショウ、クコ、ホソアオゲイトウ、オオブタクサ、シロザ、メマツヨイグサ、ヤブマオ、イタドリ、イヌキクイモ、ワルナスビなどがありました。

神奈川県植物誌改訂調査について

(事務局)

1月27日の総会で神奈川県植物誌1988の改訂のための調査について説明をしましたが、メッシュや標本の採集について、その後もいくつかの質問がありました。そこで、調査の方法について、再度説明しておきたいと思えます。

1. 調査メッシュ

調査メッシュ(地域メッシュ)は、前回の調査と概ね同じです。市町村を基本とし、大きい市町村はいくつかに分割し、標高1,000m以上も分けます。前回の調査のときには108メッシュでしたが、横浜市や川崎市で分区が

ありましたので、今回は111個のメッシュになります。このメッシュ内に生育する維管束植物(シダ植物と種子植物)について、標本にもとづいた植物目録を作り、それを集めて神奈川県全体の分布図を全種について作成します。

2. 標本の採集

111個の各地域メッシュごとに、1種類、最低1点の標本を採集します。3次メッシュ(2万5千分の1の地形図を縦横に10等分にしたメッシュ)ごとに標本を採集する必要はありません。また、前回の調査と同一産地のものは、各地域メッシュの標本リスト(総会の資料として各メッシュ担当者に配布済み)に再確認の日付と氏名をメモし、標本を作り直す必要はありません。ただし、同定に自信のないものは標本を採集してください。メモを入れた標本リストは今シーズン末(12月頃)に事務局へ提出してください。標本の作り方がわからない方は、各ブロックごとに行なわれる、標本整理等の集会に参加していただければ、自然に身につくと思います。標本は基本的には各ブロックのセンターに提出していただきますが、交通機関等の都合で他のセンターに提出されてもかまいません。各ブロックのセンターは次の通りです。

川崎市……………川崎市青少年科学館
横浜市……………横浜市こども植物園
三浦半島(鎌倉を含む)

…横須賀市自然博物館

湘南……………平塚市博物館

相模原市……………相模原市立博物館

厚木市、愛川町、清川村、綾瀬市

…厚木市博物館準備室

その他の地域

…県立生命の星・地球博物館

なお、丹沢や箱根など採集許可が必要な地域での採集は許可が下りるまでは控えてください。腕章や調査員証も用意したいと思いますが、事務局のパワー不足のため、少々遅れています。お手元に届くまでは地権者等と

神奈川県植物誌標本

① No. _____

② 学名・和名
Poa annua L.
 スズメノカタビラ
 det H. Koba, 1996.1.1

③ 採集地 厚木 市町,村 地域メッシュ AT-5

④ 地域メッシュ 温水 3次メッシュ 5339-12-37
 ⑤ 内の地名 温水 標高 50 m

⑥ 採集年月日 1995. 11. 21

採集者 海繁 太郎

⑦ 景 観:山地,丘陵,集落,市街地 大きな川,海,その他

環 境:自然林(落葉広葉樹,常緑広葉樹,針葉樹),人工林,草原,崩壊地,岩場,川原,砂浜,畑,路傍 道路法面,空地 庭,埋立地,湿地,ヨシ原,水田,休耕田,池沼,湖,塩湿地,その他

⑧ 小穂が紫色を帯びる

トラブルのないように注意してください。

3. 標本ラベル

標本ラベルは上のようなものを用意しましたが、御自分のフォーマットをお持ちの方はそれでもかまいません。その場合には、採集地の後に地域メッシュ、3次メッシュコード、環境などの不足データを補ってください。

筆記具は黒の万年筆などカーボン顔料を含むインクを使ってください。ボールペンはお薦めできません。

- ① 標本番号の欄は空欄のまま提出してください。各標本庫で資料番号をつけます。
 ② 学名は必ずしも記入しなくても結構です。

同定者と同定年月日もこの欄に記入してください。

③ 採集地の欄には市町村名を記入して、「市、町、村」の該当するものを丸で囲んでください。

④ 地域メッシュコードを記入してください。

⑤ 3次メッシュコードについては、丹沢や箱根などの山地や河川などで、2万5千分の1地形図に載っている地名では位置が特定できない場合には必ず入れてください。平地の場合では、メッシュ内の地名が書いてあれば、おおまかな3次メッシュコードをこちらで調べることは出来ますが、地図で読みとって、入れてくださると助かります。

